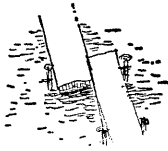


対談

「保育学」事始（その二）

—臨床と教育のあわいに—



守永英子

保育者
お茶の水女子大学
附属幼稚園

野田幸江

臨床家
愛育研究所

「子どもとひたすらに向き合う。」そこに臨床の出発点があり、到達点がある。そして、この点に関しては、保育もまた同様である。前回の対談は、この本質に迫ることで、絶えず重なり合い、その等質性を明らかにした。

ところで、前回のまともを読み直したお二人の語り手は、「当り前のことばかり」と感想をもらされた。確かに、そこに語られているのは、格別、斬新な発想でも、奇抜な方法でもない。当り前すぎるくらい当り前の、人と人の間に横たわる原理、原則ばかりである。

然し、これらは、すべて単なる理念として、或いは当為として語られているのではない。一つ一つが長年の実践を通して、全身で把握されたことがらばかりである。子どもと共にあった二十年の歳月から、したり落ちた経験のしずくなのだ。

時には、啓示のようにひらめく洞察として、時にはきびしい意識化への努力を通じて獲得されたこととして、お二人に獲得されたこれらの原則、それは、単なる書斎の学説ではなく、実験室の理論でもない。手足を泥まみれにしての実践が言葉のレベルに抽象され、体の底に沈澱して信念化されたものばかりである。そのゆえに、それらは、重く、確かなの

だ。

この経緯を的確に伝えるべく、文字は余りにも力強い媒体である。今回もまた、お二人の「おしゃべりの続き」を文字化しながら、この制約の前に、もどかしさを感じざるを得ない。改めて言うまでもないことながら、実践の生命は、文字や言葉に置換し得ない。それは、あくまでも、生きて動く「実践」さながらにあるのである。

(本田記)

第四課

保育的臨床と臨床的保育

——前回のお話合いで、「子どもとひたすらに向き合うこと」とそのためには、「自分が変ること」が重要である、など、保育と臨床に共通する根本原理が指摘されていた。お二人のお話をうかがっていると、保育と臨床の重なり合いが、ますますはつきりしてくるようですが……。

野田 実際面でもそうですね。私の臨床は、どちらかと言えば保

育的。保育臨床とでもいうのかな。それは、守永さんとのおつき合いで、保育から学んだことでしょね。

守永 何だかい気持ちになってきたわ。(笑)

野田 障害児や何かの治療となると、どこかにゆがみがある対象の相手をして、そのゆがみをもとず、という発想でしょ。でもね、幼児を扱っていると、やはりそれだけじゃないみたいなのね。仮りに、いまは、ゆがみの矯正が重視されても、その間にも子どもはどんどん発達していくのだし、いまこの時期にして上げなきゃならないことが色々あるんじゃないか、そのチャンスが逃がしちゃいけないんじゃないか、って感じるのね。例えば、言葉が出ないとか、暴力を振うとか、色々あっても、言葉が出たり、おとなしくなったりするためだけの援助をするんじゃないかと、全体としてよく発達していくために、色々な援助が必要なんだったこと。これは、保育から学んだことね。臨床仲間から学んだことじゃないみたい。

守永 ゆがみを持っていても、子どもは子どもでもものね。別に、子どもであることを止めて「ゆがみちゃん」になっちゃったわけじゃない……。(笑)

野田 そう。ただ、若干ちがうのはね、ここまでいってほしい、とか、こうなるべきだとか、そういう気持ちは余らないのね。

たとえば、保育者だと、もう一寸目的意識が強くて、何かやり始めると、これは、この道を通ってここまでいくのが当然、とかつて、到達点がハッキリしちゃうでしょ。私なんか、こうなったらいいんじゃないかって、一寸、力を貸して上げたりするけど、それが上手いかわかなくとも、別に、是非ここまでいかせたい、とか、失敗した、などと強く思わないのね。

守永 目的にも色々あるでしょうけどね。

野田 以前ね、小学生の臨床やってて、その時の体験なの。食事を全然しなくなっちゃった子どもで、牛乳だけ飲むっていうのね。それが、売店から買ってきた牛乳を、一口飲んで、「冷いからいらぬい」って、止めちゃったの。私は、そこで何が何でも牛乳を飲ませよう、と思ったわけじゃなかったんだけど、何となく、これっきりで終りにしたくないような気持ちがあったのね。それで、冷くてイヤなら、温めたいのかしら、ってわけで、「あっためようか？」って言ってみたの。

そして、二人で手で牛乳びんをかかえて、「あったかくナーレ、あったかくナーレ」ってやったのね。ところが、その子は、それで楽しくなっちゃって、牛乳を飲んだわけ。もち

ろん、冷いのをね。

これは、普通の臨床家だったら、多分、そのまま受け入れて「そう、冷いから飲みたくないのね」って、牛乳問題は処理するかもしれないわ。でも、「あったかくナーレ」なんて、二人でやってみるのは、明らかに、保育でしょ。守永さんから学んだものだという感じね。

これを、意識的に技法として使えば、「飲ますための技法①」とかつてなるでしょ。でも、私の場合、そういう感じじゃないのよね。

守永 もっと自然な、あなた自身の気持ちなんでしょう。

飲ませるための技法、というんだったら、いつでも「あったかくナーレ」が成功するとは限らない。いまの場合、相手の気持ちと自分の気持ちの中でそれが実った、ということね。

野田 それとね、その子は全然食事をしないんだから、牛乳を飲んだら栄養になるということはわかっているの。でも、私は、そのとき、飲んでくれても、或いは飲まなくとも、どっちでも同じ受けとめ方が出来る、という感じがあったの。

——そのところを、もう少し説明して頂けませんか？

野田 飲んでくれたらいいな、とは思っても、飲んだ方がよく

て、飲まないとかダメとか、ガツカリとか、そういうのじゃないのね。飲むにしろ、飲まないにしろ、いずれにしろ、その子自身の選択ということで等価値なのね。その辺が、教育の人とのちがいがかな。

教育の方の人は、どちらかというと、飲むと飲まないとは、飲むのがよくて飲まないのはいけない、みたいに、結果に序列があるんじゃないかしら。

守永 どうかなあ。

野田 その辺のところは、聞いてみたいないつも思ってることの一つ。

守永 そういう場面に追いつめられたら、私はどう考えるかな？
飲むとか飲まないは、どうでもいいんじゃないかしら？ 子どもの気持ちに焦点を当てて、それがどちらに動くか、が気になるんじゃないかしら。

飲むか飲まないかに焦点を当てたら、その子どもの行為を受け入れるか、拒むかってことになるでしょ。そうじゃなく、行為はどうでも、どんなことをしても、その子自身を受け入れていく、という点では、同じような気もするけど……。

野田 でも、一般的には、〇〇をするのがよくて、それをしないのは困るんじゃない？ 教育の分野では？

守永 一般にはね、そうかもしれない……。

——確かに、一般的に、教育では到達度を問題にしませんから、〇〇をした、〇〇に到達した、というのが評価されるようですね。そして、その結果として、〇〇をしないことが問題視され、劣等視されるわけです。

野田 でも、焦点を当てるべき部分は、そこだけじゃないでしょう。その子の気持ちが、どう動くか、というそこに焦点を当てる必要がある。それが、教育や保育への提言なの。

守永 その子自身を受け入れていくと、いつか、してほしいことをしてくれるようになることが多いみたいね。

野田 結果としてね。だけど、それを目的として、そのために受け入れるわけじゃないのね。受け入れること自体が価値だから……。

守永 最後には、目的があると思うの。例えば、食事をしない子供だったら、健康な生活のしかたを身につけてほしい、というような目的ね。でも、目先にそれをぶら下げて、食べさせたり、飲ませたりを課題にし、達成出来たか出来ないかに躍起になったら駄目でしょうね。そんなに短絡的なものじゃない。

野田 守永さんの面白さはそこね。やたら「ねらい」なんて言わ

ないで……。

一般的には「ねらいねらい」なんて、やたらねらって、それを上手くやるのがいいみたいでしょ。猿回しとお猿さんみたいな気がして悲しくなっちゃう。躍らせている方も自覚がないし、躍っている方も自覚がないんですよ。

守永 健康な子どもって、大多数が躍ってくれるんですけど。だからこわい……。

私の場合は、昔から、保育者のやろうとすることに、そっぽ向いてる子どもの方の気持ちに興味があったのね。何とか、これをさせようと行為のレベルで考えるよりも、その子の気持ちが面白いな、どう変るのかなって……。

野田 あなたの級に、そっぽ向いてる子どもなんている？

守永 いるでしょ、そりゃ。(笑)

余り、まとめようとしないうし、まとめる力もないから、目立たないかな。(笑)

第五課

子どもとの間で、大切にしたいこと (保育内容論)

——子どもの気持ちはどう動かか、つまり、自分自身に

も、周囲の人々にも肯定的な関係を結んで、積極的に生活していこうという方向に、子どもの気持ちが開かれるか、否か。そこに焦点を当てて、その気持ちの動きを作り出すのに手を貸そう。

保育とは、まさに、そういうものかと思えてきました。ところで、一般には、保育内容とはこれとこれとこれである、というような考え方がありますね。そういう点では、どうお考えですか。

守永 そこが、正直言って悩ましいのね。私の中で、上手く構造化出来ないところもあるの。昔の保育を引きずっている部分もあるし……。

もちろん、いまは、子どもの気持ちを大事に考えていますけどね。

それを話題にすると、いつも野田さんには、「いいじゃない、幼稚園で何も覚えなくとも」なんて言われちゃうのね。

野田 肯定的に生きていくことの出来る子どもなら、必要なときに、必要なことは覚える筈よ。それでいいんじゃない？

守永 それが渦中にいる人間と外にいる人間のちがいがいかな。やっぱり、どこか、一寸、ちがいのよね。

私も、何か覚えさせたり、色んな領域的な経験を体験させ

たりすることをそれほど大事に思うわけじゃないの。時には、そんなもの、どうでもいいと思うこともあるのね。もともとと大事なものがあるから……。

でも、その半面、領域的なものを捨てるなら捨てるだけの理由をきちんと言えなきゃいけない、なんて思うの。「どうでもいいじゃない」なんて、サラッとしてはられない……。

野田 「捨てるひまもないくらい、別のことが忙しいので」ってのは、どう？（笑）

守永 そうなの、まさにそう。（笑）

私には、いま、こっちが大事で、こっちで手一杯です、って感じ。

野田 私ね、六領域とか八領域とか、そんなことよくわからないし、どうでもいいみたいな気がする。

ただね、こういうとき、こういうこととして上げたらいいかな、ってことはあるわね。子どもとの関係の中で、いま、こういうことが大切かなって。

守永 そう。私にとって、それが保育内容なの。でも、そうなる、と、余りにも一人一人違いすぎるのね。それで構造化しにくい。の。

野田 その子との間で、何を大切にし、何をしっかり植えつけた

いかということ、一人一人ちがうわよね。子どもによってもちがうし、保育者によってもちがうし……。

守永 例えばね、子どもが幼稚園の庭の真中にある桜の古木に登ったとするでしょ、その時、それをどうするかなんてことも、保育者一人一人で、ずい分ちがうのね。

ある人は、そのまましておく、つまり、子どものすることとは、何でも許容しようというのね。別の人は、「その木は古くて、折れると危いから、お止めなさい」って言うでしょ。

私はね、「折れると危いし、それにみんなが大事にしていく木だから」と言って止めると思うの。それは、止め方のテクニクじゃなくて、やはり、その子との間で大切にしたいことの一つだから……。

「折れて危い」というのは、その子自身のことでしょ、「みんなが大事にしている木は折らない方がよい」というのは、木へのいたわりだし、みんなの財産とか、美しいものの価値とか、つまり、自分以外のものへも、目を向けるってことを、子どもとの間でやはり、はっきりさせておきたいの。仮りにその時、子どもには、わからなくともね。

子どもの中で、「大人が生活している」ってことの意味は、

そういうところにもあるって私は思うから……。

第六課 「知ること」と「とらわれ ること」

——子どもの大切にしているものを受け入れると同時に、

一人の人間としての大人にとって、本当に大切だと思えることは、両者の間でやはり大切にしていこう、ということでしょうか。

それにしても、よほど、一人一人について、深く知っていないといけないわけですね。

野田 そうね。だけど、知っているということと、それで上手くやれるということは別みたい。知っても、役に立てられないこともあるし……。

守永 子どもとの出会いは、瞬間瞬間ですものね。

野田 時々、ハッとすることがあるの。子どもの過去、生育史、特徴などをよく知っておくということは、それにとらわれるということじゃないのね。だけど、知っていると、つい、それにとらわれちゃうの。

たとえば、この間も、すぐ外に飛び出す子がいてね、その

子は、すぐ飛び出すんだと知っているわけね。すると、それにとらわれちゃって、その子が立ち上ったりすると、すぐ、外へ出さないよう身構えたりしてるのよね、自分自身が……。だけど、その子は飛び出すんじゃないくて、自分でこぼしたものを拭くために、雑巾を取りにいったんだって。

「ああ、しまった。はずかしい」ってしみじみ思ったの。そんな時「知ること」と「とらわれること」は別なんだなって、実感としてわかるのよね。

守永 いつか、そのことで、お電話頂いたわね。「一つ、わかったわ」って。

野田 そう。私にしては、一つの洞察だったのね。でも、やはり、時々、とらわれている……。

知ることは必要ね。いつもいつも第一目と同じじゃ積み重ねの意味がないから、生活がくり返されれば、それだけ深く知ってなきゃならない。でも、「知って、なおかつ、とらわれない」とは、どういうことなのかなって、この頃考えてるの。そのこといつもいつも考えてるって感じよ。

——確かに、その子どもことがわかってくると、自分の把握に即して予測をしてしまいますね。例えば、衝動的に乱暴することがあるという把握があると、その子

が一寸ものでも持ち上げると、すぐ、「ア、投げつけるな」なんて身構えてしまいがちです。でも、そんなとき、とらわれないで動くって、どういうことでしょう。

野田 そこらへんって、とても難かしいけど、とても大事なところね。

いまの例でも、「ア、投げるな」って身構えると、その子は投げるつもりなかったのに、逆に、誘発されて投げつけたり……。さっきの例でも、雑巾を取りに行つたのに、こっちがなまじ動いたため、外に飛び出したくなっちゃうこともあるし……。

守永 そうねえ。大人が、子どもにそうさせること多いのよね。

野田 だけど、その子が外に飛び出すという事は、知ってなければいけないのよ。

守永 いま、私の級にね、部屋の中に砂利を投げこむ子どもがいるの。部屋がいつも砂利だらけ……。

この間ね、帰るときで、みんな帰り仕度して椅子に腰かけたの。その日、作ったものなんか持ってね。その時、その子が、砂利を一杯持って、こぼしながら入ってきたんです。私は、一瞬「アッまた投げるのかな」って思ったのね。やっぱり、そう思いこんでいたのね。

でも、次の瞬間、ふと自分の気持ちが変わったの。そして「これ、持って帰りたいのね」って、声をかけたんです。すると、とかく、こちらの言うことの反対ばかりしがちな子なんだけど、「うん」って言うでしょう。「ビニールの袋に入れる？」って聞いたら、「ビニールの袋、ちょうだい」って言うんですよ。こちらの言うことを、そのまま受けて、そのまま口うつしに応答するなんて、とても、考えられなかったのよ。少くとも、私のその子に関するイメージの中には、なかった。

野田 また反抗するとか、そういうことだけだったのね。

守永 そう。いつも反対して、いたずらばかりしているものだから……。

そこで、ビニールの袋出して上げたら、それに砂利をつめて、持って帰ったの。「また投げる、困った」なんて思っで、「捨ててらっしゃい」って言ったら、その子のそんなところ、見えなかったでしょうね。

だけど、その時、どうして、フツと気持ちが変わったかなんて、自分でもわからない。「持って帰りたいんじゃないか」なんて、どうして思ったのかしら、ね。

野田 それが、経験という巨大な氷山の一角なんじゃない？ 現

われてくるものは、ほんの針の先ほどだけど、下にかくれてるものは、大きいのよ。

守永 やっぱり、いつも、どこかで、その子のことを考えてるんじゃないかな。何も考えてなければ、「お庭に捨ててらっしゃい」なんて、簡単に言っちゃったでしょうね。

野田 そうよ、いつもいつも、どこかで考えてるから、ある瞬間が生きるのよ。決して、偶然じゃないわ。

守永 その子と私の気持ちのつながりが薄いから、どこかでつながりを持ちたいと願う気持ちが根底にあるんでしょうね。だから、向こうから気持ちを重ねてこないなら、こっちから重ねて上げて、「他者と気持ちを重ねることの快さ」みたいなものを経験させて上げたい、そうして、向こうも気持ちを重ねようと試みるようになってくれたらって、どこかで考えていたんでしょね。

野田 ねえ、「ビニールの袋に入れる?」「うん、ビニールの袋でしょうだい」なんて見事よね。

それこそ、共感というやつよ。ねえ。

守永 でも、後から考えてみるとね、あの子は、本当に砂利を持って帰ったのかしら、本当にビニールが欲しかったのかしら、って思うのよ。(笑)

野田 そりゃ違うかもしれないわ。きつと違うでしょうね。

でも、「砂利捨ててらっしゃい」と言われるだろうと感じてたところに、それが肯定して貰えたわけでしょ。その子にしたらって、持つてはいるけれどどうするというのがもなく、投げつけるとか、ばらまくとかのエネルギーもなく、何とないニュートラルな状態だった。だから、持つて帰りたいとハッキリ思ってたわけでもないでしょう。

でもね、そのニュートラルな状態をプラスに動かすか、マイナスに動かすかは、ものすごく違うんじゃないかしら。

守永 そうね、それは、その時だけのことじゃなくて、今後、二人の関係を作っていく布石になるわけね。

ニュートラルな状態をマイナスに動かす、つまり、砂利をばらまく方向を誘発してしまえば、私は、それを否定しなきゃならない。「お部屋にまかないのね」とかって。ニュートラルな状態って、どちらの可能性もはらんでるから、まさにチャンスってわけ。(笑)

野田 そう。一触即発ってわけ。大人の動きですごく変るのよ。プラスの方に変わって、よい関係の土台になるか、マイナスの方に変わって、また怒らなきゃならないか……。

——子どもがその時、何をしたいと思ってるのか、それ

がピタッとわかるということは、仲々、あり得ないわけですね。そういう意味で、同じことを考えることが、共感じゃなくて、同じ方向に動き出せるような心の状態になることが、共感なんでしょうか。

野田 そうだと思えますね。「砂利を持って帰ろうと思っていたか、どうか」は問題じゃなくて、その後の動きがピタッと一致し、二人が協動的に動くという方向が重なり合ってるわけですよ。

守永 その瞬間に、パッと接近出来たみたいな喜びが、私にも相手にもあるみたいだし……。

野田 考えていることの中味までピタリ同じじゃなきゃ、共感じゃない、なんていうのは屁理屈だと思わ。そんなこと言ったら、大人と子どもの間には、共感なんて無いってことになりかねないでしょ。でも、「サア、お止めなさい、捨ててらっしゃい」とかって、マイナスの刺激ばかり与えて平然としていられる大人と一緒にいるのと、同じ方向を見よう見ようとして心砕いている大人と一緒にいるのは、大きなちがいです。

「共感なんてあり得ない」なんてスマシテる大人と、「何とか気持ちを重ねたい」と思ってる大人とじゃ、子どもの育っていく方向がちがうと思わ。

守永 大人のいる意味ってそこかしら？

野田 そうよ。「お部屋の中に砂まいちやダメ」って教えるのが、大人の役目じゃないと思うの。

守永 あなた、文部大臣になるといい。(笑)

野田 私、いつか、そんな話をしたら、「子どもの相手ってそんなに大変なんですか？ 止めたくなつた」なんて言われちゃって、困ったことがある。(笑)

守永 大変だからって、みんなに止められても困るし、かといって、大変さに気付かないで、のんきにやっているのも困るし……。(笑) 大変なことを自覚しつつ、厳粛なる日常生活を楽しくやっていくってことかしら。

—— 厳粛にして、当り前の日常生活というわけですか。それは、臨床家や保育だけの問題ではなく、親たちはもちろんのこと、大人すべての共有すべきことがらかも知れませんね。子どもの社会は、子どもを含んで構成されているのですし、「子どもと共にある大人」として、常に「厳粛な日常生活」を送っているわけですから……。

今日は、このあたりまでにおきましょう。

記録 皆川美恵子
文責 本田 和子